

石川楨浩著

『赤い星は如何にして昇ったか』

——知られざる毛沢東の初期イメージ——

米国人ジャーナリストのエドガー・スノーが著した『中国の赤い星』（一九三七—三八年）（以下、『赤い星』と略）は中国共産党の指導者たちの素顔や経歴、また同党根拠地に暮らす人々の姿を世界に初めて紹介した臨場感あふれる革命ルポの古典として名高い。

本書は、この『赤い星』を中国現代史・中国共産党史・毛沢東に関する一級の歴史資料と見なし、未解明であったスノーによる取材・執筆・出版の経緯を検証する。そして「従来の中共にたいする見方・情報を

一挙に無意味化するような、一種のパラダイム・シフト」（一〇五頁）にもなったスノーの取材と報道の前後において、毛沢東や中国革命のイメージが如何なる過程を経て形成され変遷したかを実証的に明らかにする。

六章から構成される本書は大きく二つの部分に分かれる。

第一章から第四章では、『赤い星』発表前に雄然としていた毛沢東像や毛の伝記的情報を文献・図版資料の相互比較によって考察し、毛の初期イメージが形成される過程を検証する。「さえないおじさん」、謎の「太つちよ」といった毛に関する豊富な図版は、スノーの写真が実際の毛の姿を世界に知らしめる以前の毛イメージの錯綜ぶりを示し、視覚的にも読者の探究心を刺激する。様々な毛沢東像の比較検討によって、我々の持つ情報・知識・イメージが、ある時代特有の認識（誤認）に基づく加工や整理、更には意図的な改変や改竄を経て歴史的に形成されることを示してみせる著者の手腕は絶妙である。

第五章・第六章では、スノーの取材と『赤い星』出版後の状況に焦点を当て、同

書の英語・中国語・ロシア語・日本語の各種版本を比較検討する。こうした作業を通して、同書の成立過程や各時期におけるスノーの立場や考えの変遷を解明し、スノーが中国共産党に一定の肯定的感情を抱きながらも、記事修正要請を拒むようなジャーナリスト精神を内に秘めていたことを示す。更に、中国・ソ連・日本の異なる体制や時代が『赤い星』の翻訳や出版に大きく影響し、同書の評価を左右させたことを明らかにする。

膨大な資料の博搜とその相互比較によって、毛沢東や中国共産党に関する情報の伝播ルート、そうした情報に基づく人々の認識を多角的に検証するとともに、『赤い星』が如何に執筆・修正・翻訳され、人々の運命をも変える多大な影響力を持つ「名著」の高みへ昇ったかについて実証した本書は画期的である。とりわけ資料そのものの作成過程に関する緻密な考証は瞠目に値し、読者に歴史学研究における資料批判の重要性を改めて痛感させる。それでいて巧みに読者の好奇心をくすぐり、新たな角度から中国共産党史の世界へといざなう軽妙洒脱な筆致は、本書を一層ユニークたらしめる

魅力の一つといえよう。本書が未だ謎めいた中国の「巨人」毛沢東を理解するための一歩として、現代中国、また現代史に関心を有する幅広い読者のよすがとならんことを心より願う。

(四六判 二七二頁 二〇一六年一月)

臨川書店 税別三〇〇〇円)

(川口美柚

京都大学大学院文学研究科修士課程)